

# 「朝敵」からの脱却

## — 『太平記』 卷十五の構成と展開 —

谷 垣 伊 太 雄

### 一

後醍醐天皇の、いわゆる「建武の新政」発足後、大塔宮護良親王と足利高氏との対立から、建武二年（一三三五）七月の「中先代の乱」の中での足利直義による大塔宮殺害を経て、帝が新田義貞を選択した結果、本来、後醍醐天皇対足利尊氏という対立の構図となるはずのところ、同年十二月の箱根竹下合戦を中心として足利尊氏対新田義貞という対立関係として描かれ、官軍の敗走と諸国における朝敵蜂起の中で、建武三年一月の天皇の叡山東坂本への臨幸と尊氏の入京とが描かれるのが、『太平記』卷十三・卷十四の世界であった。

卷十五の章立てを流布本<sup>(注1)</sup>で見ると次の通りである。

- 一、園城寺戒壇事
- 二、奥州勢著坂本事

三、三井寺合戦并當寺撞鏡事付依藤大事

四、建武<sup>(注2)</sup>二年正月十六日合戦事

五、正月二十七日合戦事

六、將軍都落事付藥師丸歸京事

七、大樹攝津國豊嶋河原合戦事

八、主上自山門還幸事

九、賀茂神主改補事

概観的に言えば、卷十四第八章の「主上都落」から、右の第八章「主上自山門還幸」までの約二十日間を時間的な枠として、京都を中心とする攻防が描かれるのが、卷十五である。

第一章。山門が「二心ナク君ヲ擁護シ奉テ、北國・奥州ノ勢ヲ相待由聞へ」ため、「義貞ニ勢ノ著又前ニ」東坂本を攻めるべく、細川定禅らを大将とする六万余騎が三井寺へ派遣された。これは、

三井寺（園城寺）が「何モ山門ニ敵スル寺ナレバ、衆徒ノ所存ヨモ二心非ジ」と信頼しての作戦であり、衆徒達の「忠節」によつては「戒壇造營」について「武家殊ニ加力可レ成其功」との「御教書」が発せられた。

以下、「園城寺ノ三摩耶戒壇」に關して、山門寺門の対立を中心とする歴史が詳しく回顧され、「此戒壇故ニ園城寺ノ焼ル事已ニ七箇度」に及んだため、近年は戒壇造營の企図されることもなく、そのことで却つて園城寺が「繁昌」していたことが記される。その上で、今回の足利尊氏の措置に關しては「今將軍妄ニ衆徒ノ心ヲ取ン爲ニ、山門ノ念ヲモレ顧、楚忽ニ被レ成御教書ケレバ、却テ天魔ノ所行、法滅ノ因縁哉ト、聞人毎ニ臂ヲ翻シケリ」と批判的に描かれる。

第二章。箱根竹下合戦に間合わず、足利勢を追つて上洛する北畠顯家勢に「越後・上野・常陸・下野ニ残りタル新田一族、并千葉・宇都宮ガ手勢共」が加わつて五万余騎となり、建武三年正月十二日に「近江ノ愛智河ノ宿」に着いた。同日、大館幸氏は、佐々木氏頼（十一歳）の觀音寺山城を攻略し、翌日、戦果を坂本に早馬で知らせたところ、「主上ヲ始進セテ、敗軍ノ士卒悉悦ヲナシ」、道場坊助註記祐覚が命令を受けて、七百余艘の船で一行を志那浜（湖東の草津）から坂本へと渡した。ただ、宇都宮公綱の召集を受けて同行していた宇都宮紀清両党の五百余騎は、「宇都宮ハ將軍方ニ在」と聞いて、志那浜から一行と別れて、陸路を京都に向かった。

第三章。坂本での官軍作戦会議で、①「一兩日ハ馬ノ足ヲ休」めるべきとする北畠顯家の意見と、②「今夜ノ中ニ」出撃すべきだとする大館氏明の意見とが出たが、新田義貞も楠正成も②に同意したため、早速、出撃の配備がなされた。

一方、三井寺の大将細川定禪は「東國ノ大勢坂本ニ著テ、明日可レ寄由聞ヘ候。急御勢ヲ被レ添候ヘ」と、三度も使者を送つたが、「將軍事トモシ給ハザリケレバ」、三井寺へは援軍が派遣されなかつた。

合戦は、細川軍六万余騎に対して、官軍が波状攻撃を仕掛ける形で展開する。数度の攻防の後、三井寺側が城の木戸をおろし、橋を引く戦法をとつたのに対し、脇屋義助の命令を受けた栗生・篠塚が、まず「長サ五六丈モアルラント覺ヘタリケル大率都婆二本」を引き抜き、橋として架けた上を、同じ義助配下の畑・巨理が走り渡つて、一の木戸を破り、新田勢三万余騎が攻め込む。更に、それに呼応する形で山門大衆二万余騎が、堂舎・仏閣に放火したため、敗北した三井寺側には七千三百余人の死者が出た。

この時、④首を切つて藪の中に隠された三井寺金堂の本尊（弥勒菩薩）と、⑤「空ク焼テ地ニ落」ちた「九乳ノ鼻鐘」とに關する話がある。合戦記事の後に付加されている。④については、「切目ニ血ノ付タリケルヲ見テ、山法師ヤ仕タリケン」として、大札に書かれた詞書と落首「山ヲ我敵トハイカテ思ヒケン寺法師ニゾ頸ヲ切ル、」とが紹介される。

⑥の方は、この鐘が龍宮城より伝来したものであったとして、俵

藤太秀郷説話に結びつけて語られ、「サレバ今ニ至ルマデ、三井寺二有テ此鐘ノ聲ヲ聞人、無明長夜ノ夢ヲ驚カシテ慈尊出世ノ曉ヲ待。末代ノ不思議、奇特ノ事共也」との一文で締め括られる。

#### 第四章。「長途ニ疲タル人馬、一兩日機ヲ扶テコソ又合戦ヲモ致サメ」として二万余騎とともに坂本に引き返した北畠頭家に対し、

新田義貞も同行しようとしたところ、舟田経政が押しとどめて、このまま追撃すべきだと主張する。義貞は「我モ此義ヲ思ヒツル處ニ、イシクモ申タリ。サラバ頓テ追懸ヨ」と、平坦地では「静々ト」、険しい山道では「カサヨリ落シ懸テ、透間モナク射落シ切臥セ」つつ、三万余騎で追撃した。

入京した新田義貞は、軍勢を将軍塚・真如堂・法勝寺の三手に分けて配備し、自分自身は花頂山に登って敵勢を視察した後、五十騎ずつの精銳を選抜し、「中黒ノ旗ヲ巻テ、文ヲ隠シ、笠符ヲ取テ袖ノ下ニ收メ、三井寺ヨリ引ラケタル勢ノ真似ヲシテ」足利勢を攻める。官軍二万余騎が「小勢ナレドモ皆心ヲ一ニシテ」緩急自在に戦つたのに対し、「將軍ノ八十萬騎」は「大勢ナリケレ共人ノ心不調」という状態、それでも大軍ゆえに、六十数回の騎馬戦にも踏みとどまっていたが、新田方の精銳隊が「將軍ノ前後左右ニ中黒ノ旗ヲ差揚テ」足利勢を混乱させた。

結局、足利側では、味方に裏切り者が発生したとの疑心暗鬼が生じ、高・上杉勢は山崎へ、足利・吉良・石堂・仁木・細川勢は丹波路へと、それぞれ落ちて行き、官軍が急追する。足利尊氏は「今ハ

遁ル所ナシト思食ケルニヤ」梅津・桂河辺で「鎧ノ草摺疊ミ揚テ腰ノ刀ヲ抜ントシ給フ事、三箇度ニ及」んだ。ところが、結末は「將軍ノ御運ヤ強カリケン」として官軍が日没とともに桂河から引き返したため、「將軍モ且ク松尾・葉室ノ間ニ引ヘテ、梅酸ノ渴ヲゾレメラレケル」と描かれる。

一方、細川定禪は、わざと尊氏にも知らせずに「伊豫・讃岐ノ勢ノ中ヨリ三百餘騎ヲ勝テ」京都の北方を東に迂回させて三十余箇所に放火させ、一条・二条へと進出したため、新田勢は「一戦ニ利ヲ失テ」坂本へ引き返した。定禪が早馬で尊氏に報告したため、「山陽・山陰兩道へ落行ケル兵共」も京に戻った。

第五章。正月二十日夕方までに鎌倉から二万余騎が到着した坂本の官軍側では、「悪日」などを理由に「兎ニ角ニ延引シテ、今度ノ合戦ハ、廿七日ニ」と定めた。当日「十萬三千餘騎」の官軍は五方向に陣取つたが、「敵ニ知セジ」として、わざと篝火を焚かなかつた。合戦は「辰刻」と定められていたが、「マダ卯刻ノ始」に「機早ナル若大衆共」は、宇都宮紀清両党の神楽岡城を攻めた。中でも妙観院因幡堅者全村は、「上差一筋抽出テ、櫓ノ小間ヲ手突」にする奮戦を見せ「手突因幡」と名付けられた。連絡を受けた尊氏は、今河・細川の一族に三千余騎を添えた援軍を派遣したものの、神楽岡城が敗北した後だったため、空しく戻るしかなかった。

楠正成・結城宗広・名和長年ら三千余騎の出撃を見た尊氏は、上杉重能・畠山国清・斯波高経の五万余騎を派遣した。ところが、「元

來勇氣無雙ノ上智謀第一」の楠の「一枚楠ノ輕々トシタルヲ五六百帖ハガセテ、板ノ端ニ懸金ト壺トヲ打テ、敵ノ驅ントスル時ハ、此楠ノ懸金ヲ懸、城ノ極桶ノ如ク二町ガ程ニツキ弁ベテ、透ヨリ散々ニ射サセ、敵引ケバ究竟ノ懸武者ヲ五百餘騎勝テ、同時ニバツト驅サセ」るといふ応戦によつて、五条河原へ退却する。

次に粟田口より押し寄せた北畠顕家勢二万余騎に対しては、「敵モ敵ニコソヨレ、尊氏向ハデハ叶マジ」と尊氏自身が迎撃。一進一退の状勢のところ、新田義貞・脇屋義助らが参戦したことで、足利勢は「馬ヲ馳倒シ、弓矢ヲカナクリ捨テ、四角八方へ逃散」つた。義貞は、わざと「鎧ヲ脱替へ馬ヲ乗替テ」ただ一騎で尊氏を狙つたが、結局「將軍運強クシテ」発見できなかったため、やむをえず軍勢を分けて、逃げる敵を追わせた。ところが、深追いしすぎた里見鳥山勢が全滅してしまつたため、他の軍勢は「ソ、ロニ長追ナセソ」と、全員、京都へ引き返した。

日没後、楠正成は総大将義貞に「御方僅ノ勢ニテ京中ニ居候程ナラバ、兵皆財寶ニ心ヲ懸テ、如何ニ申ストモ、一所ニ打寄ル事不レ可レ有候」今日ハ引返サセ給ヒ候テ、一日馬ヲ休メ、明後日ノ程ニ寄セテ、今一アテ手痛ク戦フ程ナラバ、ナドカ敵ヲ十里・二十里ガ外マデ、追靡ケデハ候ベキ」と提言、義貞も了解し坂本へと引き返した。

丹波路へ退却すべく寺戸の辺まで赴いていた尊氏は、「京中ニハ敵一人モ不レ殘皆引返シタリ」と聞き帰京した。諸方へ逃走していた軍勢も京都に戻つたが、この章の末尾には「入洛ノ體コソ恥カシ

ケレドモ、今モ敵ノ勢ヲ見合スレバ、百分ガ一モナキニ、毎度カク被レ追立、見苦キ負ヲノミスルハ非直事。我等朝敵タル故歟、山門ニ被咒詛故歟ト、謀ノ拙キ所ヲバ聞テ、人々怪シミ思ハレケル心ノ程コソ愚ナレ」との批評が付けられている。

第六章。叡山に戻つた楠正成は、翌朝「律僧ヲ二三十人作り立テ京へ下シ」、方々の戦場で死体を探させた。怪しんで足利勢が尋ねると、僧達は涙をおさえながら「昨日ノ合戦ニ、新田左兵衛督殿・北畠源中納言殿・楠木判官已下、宗トノ人々七人迄被討サセ給ヒ候程ニ、孝養ノ爲ニ其尸骸ヲ求候也」と答えた。足利尊氏はじめ、高上杉達もそれを信じて探索させたが、首は発見できなかった。一方、正成は「同日ノ夜半許」に「下部共ニ焼松ヲ二三千燃シ連サセテ、小原・鞍馬ノ方へ」送つた。足利方は、それを官軍勢の敗走と判断し、尊氏は「サラバ落ヌ様ニ、方々へ勢ヲ差向ヨ」として、軍勢を各方面に派遣した。

これに対し、官軍は「宵ヨリ西坂ヲ、リ下」して都の北東部に陣取らせた上で、「二十九日ノ卯刻」に二条河原へ出撃させた。洛中が手薄になつて来た足利勢は「夢ニモ知ヌ事ナレバ俄ニ周章フタメキ」、逃走する者、僧となる者、自害する者と、大混乱を生じる。

結局、尊氏も「其日」丹波の曾地まで落ち、四国・西国勢も摂津の芥川まで落ちた。ところが、「兵庫湊河ニ落集リタル勢」から、「急ギ攝州へ御越候へ、勢ヲ集テ頓テ京都へ責上リ候ハン」との連絡が届いたため、尊氏は二月二日、湊川へと向かつた。その途中で

尊氏は随伴していた薬師丸（のちの「熊野山ノ別當四郎法橋道有」）を呼び、「如何ニモシテ持明院殿ノ院宣を申賜テ、天下ヲ君與<sub>レ</sub>君ノ御争ニ成テ、合戦ヲ致サバヤト思也。御邊ハ日野中納言殿ニ所縁有ト聞及バ、是ヨリ京都へ歸上テ、院宣ヲ伺ヒ申テ見ヨカシ」と秘かに命じ、三草山より上洛させた。

第七章。尊氏の湊川到着によつて、意気がつた軍勢は二十万騎となつた。ところが、「其事トナク」湊川に三日間逗留している間に、宇都宮勢五百余騎は途中から引き返して官軍となり、「八幡ニ被<sub>レ</sub>置タル武田式部大輔モ、堪カネテ降人ニ成」つたりしたことで、官軍側の軍勢も増加した。二月五日、北畠顕家・新田義貞の十万余騎は京都を出立し芥川に到着、それを知つた尊氏も、直義の十六万騎を京都に向かわせた。

両軍は、二月六日に摂津の豊島河原で対決したが勝負は決まらなかつた。そのあと、正成・義貞勢と直義勢との攻防があり、直義は湊川まで退却した。

味方の戦いぶりを見て「退屈」の様子を見せている尊氏に、大伴（大友貞宗）が「只先筑紫へ御開キ候ヘカシ。小貳筑後入道御方ニテ候ナレバ、九國ノ勢多ク屬進セ候ハ、頓テ大軍ヲ動テ京都ヲ被<sub>レ</sub>責候ハンニ、何程ノ事カ候ベキ」と勧めたのに対し、「ゲニモトヤ思食ケン」尊氏は直ちに大伴の船に乗つた。これを見た諸軍勢が遅れるまいとして、二十万騎が三百余艘に乗船しようとしたため、大混乱が生じた。

第八章。二月二日、後醍醐天皇は叡山より還幸し、花山院を皇居とした。同八日、義貞が「ユ、シク」帰京。ところが、「其時ノ降人一萬餘騎」が全員「元ノ笠符ノ文ヲ書直シテ」付けていたものの、「墨ノ濃キ薄キ程見ヘテ、アラハニシルカリケル」ことについて、翌日、五条の辻に「二筋ノ中ノ白ミヲ塗隠シ新田々々シゲナ笠符哉」という落首の高札が立てられた。

臨時の除目が行われ、新田義貞は左近衛中將、義助は右衛門佐に任ぜられた。更に、「建武」は「公家ノ爲不吉也」として、「延元」と改元された。

第九章では、賀茂神社の神主職は「重職トシテ、恩補次第アル事ナレバ、咎無シテハ改動ノ沙汰モ難<sub>レ</sub>有事」であつたのに、尊氏が貞久から基久に改補したこと、ところが、それから二十日もたたず「天下又反覆」による朝廷の措置として、神主職が貞久に返還されたことが短く記され、それに続けて、「兩院ノ御治世替ル毎ニ轉變スル事、掌ヲ反スガ如シ」として、基久の娘をめぐる二人の皇子（後の後醍醐帝と後伏見帝）の争いを詳述し、最終的には、基久が「出家遁世ノ身」となつた事で締め括られている。

## 一一一

卷十五の足利尊氏は、全体として批判的に形象される。まず、第

一章に於ては、園城寺（三井寺）側の協力が得られた場合には戒壇造営に尽力するとの「御教書」を發した事について、「園城寺ノ三摩耶戒壇」をめぐる山門（延曆寺）と寺門（園城寺）との対立抗争の歴史を山門側が優勢の力関係の中で回顧し、又、戒壇造営の企てがないことによる「寺門繁昌」の「近年」を確認し、「今將軍安ニ衆徒ノ心ヲ取シ爲ニ、山門ノ忿ヲモ不レ顧、楚忽ニ被レ成御教書」た事を「天魔ノ所行、法滅ノ因縁」として「聞人毎ニ臂ヲ翻シケリ」と批判する。

第三章では、三井寺に派遣されていた細川定禪の援軍要請に対して尊氏が情勢分析を誤まり援軍を派遣しなかつたゆえの、官軍側の勝利が記され、第六章では、楠正成の虚報作戦に踊らされる尊氏側の動きが「餘ニ面影ノ似タリケル頭ヲ二ツ獄門ノ木ニ懸テ、新田左兵衛督義貞・楠河内判官正成ト書付ラセラレタリケルヲ、如何ナルニクサウノ者カシタリケン、其札ノ側ニ「是ハニタ頸也。マサシゲニモ書ケル虚事哉」ト、秀句ヲシテゾ書副テ見セタリケル」と、戯画的に描かれる。第六章の場合は、巻八に於て、河野・陶山と対照的に描かれた隅田・高橋の例にも類似するものである。

第七章では、足利尊氏が大夫貞宗の勧めを「ゲニモ」として筑紫に落ちて行く道を選んだ事について、「尊氏卿ハ福原ノ京ヲサヘ（傍点筆者。以下同じ）被ニ追落ニテ、長汀ノ月ニ心ヲ傷シメ、曲浦ノ波ニ袖ヲ濡シテ、心ツクシニ漂泊シ給ヘバ、義貞朝臣ハ、百戦ノ功ヲ高シテ、數萬ノ降人ヲ召具シ、天下ノ士卒ニ將トシテ花ノ都ニ歸給フ。憂喜忽ニ相替テ、ウツ、モサナガラ夢ノ如クノ世ニ成ケリ」

と、義貞と対照させる形で、『平家物語』における平氏の都落ちに重ねつつ否定的に描かれている。

この第七章末尾の記述は、巻十五の人物形象の、もう一つの側面をも象徴するものである。たとえば、楠正成は、第五章に於て「勇氣無双ノ上、智謀第一」の者と記され、第六章でも、俄か仕立ての「律僧」を使つての陽動作戦によつて足利軍を攪乱する存在である。しかし、むしろ、第四章に於て、坂本に引き返す北畠顕家に一旦は同行しようとしたにも拘らず、舟田経政が積極作戦を主張すると、それに同意する形で「我モ此義ヲ思ヒツル處ニ、イシクモ申タリ」と京都へ進攻する新田義貞の存在の方が大きく描かれる。義貞は、中黒の旗を巻いて紋を隠し、笠符を取つて敵中に紛れ込むという、楠的攻撃方法をとリ、最終的には退却したもの、第四章末尾は「義貞朝臣ハ、僅ニ二萬騎勢ヲ以テ將軍ノ八十萬騎ヲ懸散シ、定禪律師ハ、亦三百餘騎ノ勢ヲ以テ、官軍ノ二萬餘騎ヲ追落ス。彼ハ項王ガ勇ヲ心トシ、是ハ張良ガ謀ヲ宗トス。智謀勇力イヅレモ取々ナリシ人傑也」と評されている。更に第五章でも「態鎧ヲ脱替ヘ馬ヲ乗替テ」戦う義貞が描かれる。

しかし、巻十四以後、対立構図の実質的存在として形象化されてきた尊氏・義貞であるが、巻十五の義貞は、必ずしも尊氏に對峙しての肯定的人物として描かれているわけではない。すなわち、第三章・第四章に於て、味方の北畠顕家が「一休止」あるいは「休養」のための引き揚げ、という消極的行動をとつた時、義貞は、それとは反対の積極的即時攻撃の道を選んだのであつた。第三章に於ては、

義貞は、大館氏明の提言に対して、楠正成とともに「此義誠ニ可レ然候」と同意したのであつたし、第四章に於ては、一度は顕家と行動を共にしようとした義貞に対して、舟田経政が「馬ヲ叩テ」京都攻撃を提案したのを、義貞は「我モ此義ヲ思ヒツル處ニ、イシクモ申タリ」と、当然のように許諾して京都へと進攻した。つまり、義貞は、家臣の提言により、北畠顕家と対照的行動をとる事で、その存在感を明確にするのである。

一方、尊氏の方は、第五章末尾に於て、足利勢の敗北の繰返しを「我等朝敵タル故歟、山門ニ被レ咒詛故歟」と考え（この場面は、尊氏個人の認識ではないが、作者は「謀ノ拙キ所ヲバ聞テ、人々怪シミ思ハレケル心ノ程コソ愚ナレ」と批判している）、第六章に於ては、尊氏自身が薬師丸に対して「今度京都ノ合戦ニ、御方毎度打負タル事、全ク戦ノ咎ニ非ズ。情事の心ヲ案ズルニ、只尊氏混朝敵タル故也」と語っている。

ところが、巻十五全体を通じて、決して肯定的に描かれているわけではない。尊氏だが、滅亡はしない。この、全面否定にはならない事への説明として導入されるのが、「運」である。第四章では、敗走の途中で尊氏が三度も自害しようとしたことを記した後に「サレドモ將軍ノ御運ヤ強カリケン」として、追撃していた官軍が日暮れとともに引き返したとする。又、第五章では、義貞が鎧・馬を替え、ただ一騎で尊氏を狙ったにも拘わらず「將軍運強クシテ」発見できなかったと記す。

なお、巻十五における尊氏の呼称をまとめると、表(一)のよう<sup>注4)</sup>に

なる。

尊氏は、後醍醐帝と対峙する立場をとる事によって、「朝敵」となった。しかし、『太平記』作者は、その事を顕在化させず、むしろ尊氏と義貞との対立構図として描いてきた。

表(一)

呼称	章段								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
① 將軍				13	7	6	7		
② 尊氏卿					2		1		
③ 尊氏朝臣								1	
④ 尊氏			1	1	1				
⑤ その他					1				
⑥ 朝敵					1	1			
⑦ 逆徒・逆臣							2	1	
									2
									2
									3
									37
									合計

それは、表(一)に見られるごとく、尊氏を「朝敵」としてよりも「將軍」として形象しようとする姿勢となつてもいる（ちなみに、新田義貞の場合は、「義貞朝臣」の九例が最も多く、以下、「新田左兵衛督(義貞)・「義貞」の順。

しかし、実は、表(一)で三例しかない「朝敵」の二例が、尊氏(及び尊氏側)の発言の中に見られる点にこそ注目する必要がある。とりわけ、第六章での尊氏自身の言葉の中で「朝敵」は、「如何ニモシテ持明院殿ノ院宣ヲ申賜テ、天下ヲ君與レ君ノ御争ニ成テ、合

戦ヲ致サバヤ」という、次の展開に結びつけて述べられている。このことは、数度の敗走や自害の決意をも踏まえた上での、尊氏の認識と展望とを示している。

とすれば、尊氏対義貞という対立構造を超越するものが、次の段階では用意されることにならざるをえない。

それは、第九章が、賀茂社の神主改補を「尊氏卿」と「公家(朝廷)」との天下(京都)制圧の力関係による急激な変革人事の例として記述しつつも、「兩院ノ御治世替ル毎」の改補へと叙述を展開させている事と繋がっていく。しかも、第九章大半は、基久の娘をめくつての「伏見宮」と「帥官」との確執を描き、「帥官御治世ノ初、基久指タル各ハ無リシカドモ、勅堪ヲ蒙リ神職ヲ被<sub>レ</sub>解」たと述べ、最終的には基久が「出家遁世ノ身」となったことを記して、巻十五は終わる。したがって、「帥官(後醍醐天皇)の「御憤ノ未深カ」つたための基久の神職解任は、「帥官」への批判的視線をもって締め括られていることになる。

このように見てくると、「朝敵」となった足利尊氏が自覚せざるをえなかった「敵」としての立場から言えば、基準として△▽であるはずの「朝(後醍醐帝)側の問題が、結果的には摘出されていることにもなる。

(注1) 引用は日本古典文学大系本(岩波書店)による。

(注2) テキストは、章段だけでなく、第三章の落首詞書も「建武二年」とするが、建武三年が正しい。

(注3) 天正本は「腹を切らんとし玉ふ事、三箇度までになりけり」。なお、天正本の引用は、新編日本古典文学全集本(小学館。底本は漢字片仮名まじり)による。

(注4) ①「將軍」の用例数には「將軍方」の三例を含む。④「尊氏」のうち、二例は自称。もう一例は義貞の言葉。⑤は舟田経政の言葉の中の「足利殿御兄弟」と、「大將」。なお、尊氏個人のみを指すとは言えないが、参考として「朝敵」

「逆徒」「逆臣」も併記した。  
なお、『太平記』第二部(巻十二)を巻十六を境として「前半」と「後半」とに区分された長谷川端氏の論「太平記の構想」(『太平記の研究』汲古書院)を踏まえて、大森北義氏は、巻十四～十六(西源院本)の三巻を第二部世界の「展開部」の「前半」とし、巻十七～二十の四巻を「後半」とした上で、次のように述べておられる(『太平記』の構想と方法) 明治書院)。

この「前半」世界を通して尊氏は「將軍」は勿論のこと「尊氏卿」とも呼称できない筈の人物であった。『太平記』のこうした呼称は、蓋し、この「前半」世界で描く尊氏の「開運」、あるいは、「後半」世界で達成される「征夷大將軍就任」を展望しつつそれを志向したものであり、いわばその達成を前提とした表現である。

(注5) テキストとした流布本や天正本等では、第九章で巻十五が終わっているが、神田本・西源院本・玄玖本・梵舜本等

は、流布本卷十六の第一章、第三章までを卷十五に収めている。西源院本の本文を引用すると、卷十五の末文は「和漢兩朝之例ヲ引テ、武運ノ天ニ叶ヘル由ヲ申サレタレハ、將軍モ當座ノ人々モ、皆歡喜ノ笑ヲソ含マレケル」となっており、西走した尊氏の九州制圧を確認する構成となっている。

なお、三井寺の鐘についての記述がある卷十五第三章の末尾部分に関して、諸本の差異を、表(二)として掲げた。足利勢に協力した三井寺の敗北を描く中で、依藤太伝説の引用へと進むが、天正本の記す「あさましかりし事ども」の原因は山門(官軍側)の「兵火」によるものである。西源院本では「山徒三人」の乱行とその結末としての「不思議」を描く。流布本などが「末代ノ不思議、奇特ノ事」という鐘についての説明だけで終わっている不安定さについて、右の二本は解消する姿勢を見せたものとも言えよう。

表(二)に引用した本文は、西源院本(刀江書院)・神田本(國書刊行會)・天正本(小学館)・新編日本古典文学全集。なお、この本の底本は漢字片仮名まじり・義輝本(勉誠社)・玄玖本(勉誠社)・梵舜本(古典文庫)による。

ところで、第九章の「其比先帝ハ未帥宮ニテ」(流布本)の「先帝」(神田本・玄玖本・天正本等も)は、西源院本の「當今」の方が適切かと思われるが(後醍醐帝が「先帝」の呼称で記されるのは、卷四の隱岐配流から卷七の隱岐脱

出まで。卷三に一例のみ「前帝」あり、「先帝」とする諸本の多い理由は不明。

表(二)

<p>西源院本</p>	<p>軍終リテ後、此鐘ヲ取テ、寺ノ上一坂ニ埋テ隠シタリケルカ、四月ノ比後夜ノ鐘タシカニ聞ケル程ニ、彼此逃ケ隠レ居タル衆徒聞<sup>レ</sup>之コソ、</p>	<p>されハ今ニ傳テ此<sup>カチ</sup>ノ聲ヲ聞人無明長夜ノ夢ヲ驚テ慈尊出世ノ曉ヲ待ツ末代奇特ノふしギ也</p>	<p>サテハ此代ニテサテハツヘカラス、將軍立返、寺再興有ヘシト憑ヲ殘シ思ハレケレ、サレハ今ニ傳ハテ、此鐘ノ聲ヲ聞人、無明長夜ノ夢ヲ驚カシ、慈尊出世ノ曉ヲ待ツ、天下無双ノ重寶也、ソレノミナラス、彼寺ヲ山徒三人給テ、山ノ木ヲ切焼、然ニ坊舎ヲコホチ取り、竹木一モ無切り取ケルニ、新羅森ヲ切りケル者、忽ニ目クレ、鼻血タリ、手足切りテ、木ノ枝一モ取ラレサリケルコソ不思議ナレ</p>
<p>天正本</p>	<p>されば今に伝へて、この声をきく人、無明長夜の夢を覚して、慈尊出世の曉を待つ。末代奇特の不思議なり。かやうに止事なき仏閣一時に兵火のために侵され、灰燼となつて徒らにその跡を残しける。あさましかりし事どもなり。</p>		
<p>義輝本</p>	<p>サレハ今ニ傳テ此鐘ノ声ヲ聞人、無明長夜ノ夢驚テ、慈尊出世ノ時ヲ待ツ、末代奇特ノ不思議也</p>	<p>玄玖本</p>	<p>其レハ今ニ傳ハテ此聲ヲ聞人無明長夜ノ夢ヲ驚テ慈尊出世ノ曉ヲ待ツ末代奇特ノ不思議也</p>
<p>梵舜本</p>	<p>サレハ今ニ至ルマテ三井寺ニ有テ此鐘ノ声ヲ聞人、无明長夜ノ夢ヲ驚カシテ、慈尊出世ノ曉ヲ待ツ、末代ノ不思議、奇特ノ事也</p>		
<p>流布本</p>	<p>サレバ今ニ至ルマデ三井寺ニ有テ此鐘ノ聲ヲ聞人、無明長夜ノ夢ヲ驚カシテ慈尊出世ノ曉ヲ待。末代ノ不思議、奇特ノ事共也。</p>		